

巻頭言 マイノリティの差別解消に向けて

三浦まり

『グローバル・コンサーン』第3号は、コロナ禍という時代状況下でグローバル・コンサーン研究所が展開した多彩な活動を盛り込んだ充実の内容となった。特集1「新型コロナウイルス・パンデミック関連企画」、特集2「2020年度ソフィアシンポジウム ジェンダー・アクティヴィズムと社会変革—韓国#Me too 運動と台湾の同性婚法制化運動が日本社会へ示唆するもの」、特集3「大学の中でLGBTQ+の居場所を学生と共につくっていくこと」はどれもグローバル・コンサーン研究所が2020年度に実施した企画を下敷きになっている。

2020年4月7日に緊急事態宣言が発令され、キャンパス活動も全面的にオンラインに移行してから、どのようにグローバル・コンサーン研究所の活動が継続できるか当初は不安もあった。しかし、結果的には時空を超えて繋がることのできるオンラインのメリットを活かした様々な活動を展開し、それらの貴重な記録を本号に収録できた。さらには特集4「日本における非正規滞在外国人」ではコロナ禍において非正規滞在外国人が仮放免されるという状況下で実現したインタビューや調査報告を収録している。

グローバル・コンサーン研究所はアカデミアに閉じこもるのではなく、学問的知見と社会実践をつなぎ、学生たちとの連携の上に「意識化」を図ることを常に心掛けてきた。コロナ禍は、社会における差別・憎悪を悪化させ、立場の弱い人々をさらに追い込んでいる。様々な社会矛盾が一気に噴出し、可視化されるようになってきたが、それらを解決する糸口をどのように見出すかに関しての社会対話はまだまだ十分とはいえない。

本号に収められた4つの特集に貫くテーマは、様々なマイノリティが差別、排除されてきた歴史や政治的文脈を振り返り、マジョリティの意識覚醒につなげる試みといえる。まずはマイノリティの経験を知ること、具体的な痛み、悲しみ、恐怖について、当事者の語りに耳を澄ませ、言葉にならないことを含めて想像することが、最初の一步ではないだろうか。その上で、マイノリティの排除や搾取につながる制度を洗い出し、改革していくことが求められる。

マイノリティの人権については、「ダイバーシティ&インクルージョン」が大学や企業でも叫ばれるようになり、意識啓発が試みられるようになってきた。しかし、

ややもすれば商業化したそうした取り組みには、「マジョリティにメリットがある限りにおいて、マイノリティを包摂する」という思想が見え隠れする。人権というのは普遍的なものであり、誰であっても等しく享受するものであるという基本的理解が社会でまだ浸透していないようである。あるいは、それを知っているからこそ、人権や差別解消という言葉を迂回し、「ダイバーシティ&インクルージョン」のような、摩擦の少ない言葉が選択され、内容が希薄化されているのかもしれない。

BLM運動の昂揚や、フェミニズム、LGBTQ+、障がい者権利運動など、マイノリティ側から差別撤廃を求める声は日増しに高まっている。他方で、何が差別に当たるか分からない、説明しろという声も聞こえてくる。それに対して、マイノリティ側は何度も繰り返し声をあげてきたではないか、聞く耳をもたなかったのが悪い、なぜまた辛い経験を説明させるのかという反論が出ている。差別の立証責任をマイノリティ側に負わせようとするマジョリティの特権にマジョリティが気づくことは稀だ。そのため、差別的言動の企画をボイコット、取り消しする事態に対し、「キャンセル・カルチャー」だと揶揄する言説も登場している。

こうした価値観の対立はアメリカでは「文化戦争」と呼ばれてきた。日本でも根本的な価値観をめぐる対立は戦後常に存在してきたが、一党優位体制が続き、政権交代がほとんどないため、マイノリティの権利保障は政治とはどこか切り離され、周縁化された争点にとどまっていた。ようやく女性や性的マイノリティの運動が一定程度の影響力を持つようになり、また若い世代ほどこうした争点に敏感であるため、政党も対応を迫られるようになっている。

しばらくは両陣営の主張が言説空間を飛び交い、対話は成立せず、分断が深まるのかもしれない。日本版の文化戦争を目の当たりにすることになるだろう。しかし、これは人権が普遍化する際の通過点だと捉えたい。当面は醜い言葉が発せられる状況が続くことを前提に、差別解消に向けた社会対話に根気よく取り組むことがグローバル・コンサーン研究所の使命だろう。

私たちの歴史は、揺り戻しを経験しつつも、人権の保障に向けて歩みを続けてきた。法制度上の整備だけではなく、近年では無意識の偏見やマイクロアグレッションにも注目が集まっている。形を変えた差別や、あるいは意識の底に潜在化する差別についても、その解明と是正に向けた具体的取り組みが実践されている。本号もまた、そうした社会的実践の一つとしてお読みいただければと思う。

三浦まり（みうら まり）（『グローバル・コンサーン』編集長）